

二〇二六年

十二月九日（水）～十一日（金）

真宗大谷派
静岡別院

報ほう恩おん講こう

恩徳讃 おん どの さん

正像末和讃 しょうぞうまつわさん

如来大悲の恩徳は にょらいだいひ おん どの

身を粉にしても報ずべし み こ ほう

師主知識の恩徳も し しゅ ち し き おん どの

ほねをくだきても謝すべし しや

目次

▼全体日程	2
▼親鸞聖人の御生涯	3
▼法要次第	7
▼御伝鈔について	13
▼帰敬式について	14
▼帰敬式日程	裏表紙

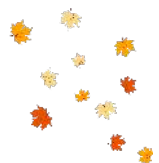


全体日程

	9 日 (水)	1 0 日 (木)	1 1 日 (金)
7 : 3 0		・ 晨 朝	・ 結願晨朝
9 : 3 0		・ 日 中 ・ 法 話	・ 帰敬式 (式執行：御鍵役) ・ 法話 (静岡別院輪番)
1 0 : 3 0			・ 結願日中 (御鍵役御出仕) (雅楽入り法要)
1 3 : 3 0	・ 初逮夜 ・ 初夜勤行 ・ 御伝鈔拝読 (親鸞聖人御一代記) ・ 法 話	・ 結願逮夜 (御鍵役御出仕) (雅楽入り法要) ・ 法 話	

法 話：海 法龍師（神奈川 長願寺住職）

雅 楽：岡崎教区「自然楽会」



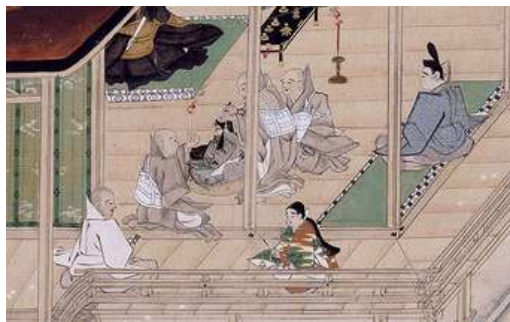
親鸞聖人の生涯

浄土真宗の宗祖親鸞聖人は、戦乱や災害が相次いだ平安時代末期から鎌倉時代にかけて九十年のご生涯を送られました。そのご生涯をたずねてみましょう。

① 誕生と出家（九歳）

一一七三年（承安三年）、親鸞聖人は、京都にお生まれになりました。父である日野有範^{ひのありのり}は朝廷に仕える役人でしたが、母についてはさだかではありません。

九歳の時、親鸞聖人は、後の天台座主・慈円^{じえん}のもとで出家されます。それから二十年もの間、比叡山延暦寺できびしい修行と学問にはげまれました。しかし、どれだけ修行と学問にはげんでも、さとりを開く道を見出すことはできませんでした。



出家（『本願寺聖人伝絵』康永本・重要文化財）



親鸞聖人御影（安城御影）

② 法然上人とのであい（二十九歳）

親鸞聖人は、二十九歳の時、比叡山の仏教と決別し、道を求めて聖徳太子ゆかりの六角堂に籠られました。そして、九十五日目の暁、聖徳太子の夢告にみちびかれて、法然上人のもとをたずねられます。法然上人は、だれに対しても平等に「ただ、念仏もうしなさい」とお説きになっていました。親鸞聖人は、この教えこそ、すべての人に開かれている仏道であるとうなずかれ、法然上人を生涯の師と仰ぎ、念仏者として歩み出されました。法然上人のもとで、親鸞聖人は約六年間過ごされました。その間に、法然上人から主著『せんじやくほんがんねんぶつしゆう選択本願念仏集』の書写と真影（法然上人の肖像画）の制作を許されました。また、恵信尼公と出会い、結婚されたのもこの頃とされています。



選択本願念仏集の付属

③ 越後・関東での生活（三十五歳～六十歳ごろ）

法然上人の念仏の教えには、親鸞聖人だけではなく、老若男女、身分を問わず、たくさんの人が帰依されました。しかし、興福寺や延暦寺などの他宗から強い反発を受け、ついに朝廷が弾圧に踏み切ります。その結果、四人が死罪、八人が流罪というきびしい処罰が下され、法然上人は土佐（現在の高知県）へ、親鸞聖人は越後（同新潟県）へ流罪となりました。親鸞聖人三十五歳の時でした。

五年後、流罪が許された親鸞聖人は、法然上人の死を知ると、京都には戻らず関東へ向かわれました。そこで約二十年間滞在し、常陸（同茨城県）の稲田を中心に、念仏の教えを広く伝えていかれました。

また、この地において、主著『顕浄土真実教行証文類』
（『教行信証』^{きょうぎょうしんしやう}）を書き始められたとされています。



『顕浄土真実教行証文類』坂東本

④ 京都での生活 （六十歳ごろから九十歳）

親鸞聖人は、六十歳ごろ関東から京都に戻られたといわれています。

その後、関東では念仏の受けとめをめぐって、様々な混乱や対立がおこりました。そのなかで、誤った教えを広めた長男の慈信房善鸞と親子の縁を切るという悲しい出来事もありましたが、親鸞聖人は、『教行信証』を書きすすめるとともに、終生同朋・同行に手紙や書物を送り、念仏の教えを伝え続けられました。

一二六二（弘長二）年十一月二十八日、親鸞聖人は九十年の生涯を終えられました。末娘の覚信尼公ら家族や門弟たちが、死を看取り、葬儀を行ったといえます。遺骨は、大谷（現在の京都市東山区）に埋葬され、お墓が立てられました。このお墓が廟堂となり、やがて本願寺（真宗本廟）の御影堂へと受け継がれていくのです。この廟堂に関東（坂東）の門弟たちが参拝し、親鸞聖人をしのび念仏する姿が、後に坂東曲^{ばんとうふし}となったと伝えられています。



入 滅



報恩講法要次第

①

十二月九日

【初逮夜】午後一時三十分

先出仕

次総礼

次正信偈 真四句目下

念仏讃 淘五

和讃 彌陀成仏ノコノカタハ 次第六首

五遍返

回向 我說彼尊功德事

次総礼

次退出

御文 大阪建立

法話 海 法龍師（神奈川長願寺住職）

【初夜】午後三時

正信偈 同朋奉讃式

和讃 彌陀成仏ノコノカタハ

御伝鈔拝読 上下巻

（※十三項 参照）

【装束】

晨朝

▼裳付・五条袈裟

日中ならびに逮夜

▼裳付・五条袈裟・差貫

御伝鈔拝読者

▼裳付・五条袈裟・差貫





報恩講法要次第②

十二月十日

〔晨 朝〕 午前七時三十分

先	出仕	次	総礼	次	正信偈	念仏讃	和讃	五遍返	次回	次	総礼	次	退出	御文
					中読	淘五	本師龍樹菩薩ハ		世尊我一心					毎年不欠（※）
							次第六首							

※『御文』
 本願寺八代蓮如上人が、御門徒に真宗の教えを分かりやすく伝えるために書かれた手紙。蓮如上人のご息である実如上人が選ばれ五帖八十通にまとめられたものを五帖御文と呼ぶ。日頃のお勤めの最後に拝読される。





報恩講法要次第③

十二月十日

〔日 中〕 午前九時三十分～

先 出 仕

次 総 礼

次 文類偈 真四句目下

念仏讃 淘五

和讃 生死の苦海ホトリナシ 次第七首

五遍返

次 回 向 願以此功德

次 総 礼

次 退 出

法 話 海 法龍師（神奈川長願寺住職）





報恩講法要次第④

十二月十日

〔結願逮夜〕 午後一時三十分～

先 乱 声

出 仕

下 臈 出 仕

次 着 座 楽

次 総 礼

次 正 信 偈 真 四 句 目 下

念 仏 讃

淘 五

三 重 念 仏 附 物

和 讃

五 十 六 億 七 千 萬

次 第 六 首

五 遍 返

世 尊 我 一 心

附 物

次 回 向

次 総 礼

退 出 楽

下 臈 退 出

御 俗 姓 (※)

法 話 海 法 龍 師 (神 奈 川 長 願 寺 住 職)

※ 『御俗姓』

本願寺第八

代・蓮如上人

が親鸞聖人の

ご遺徳を讃え

るなかで、真

宗門徒として

の心得を記さ

れたもの





報恩講法要次第⑤

十二月十一日

〔結願晨朝〕 午前七時三十分〜

先出仕

次総礼

次正信偈 真読

念仏讃 淘五

和讃 無碍光仏ノミコトニハ 次第六首

五遍返

次回向 我說彼尊功德事

次総礼

次退出

御文 鸞聖人





報恩講法要次第⑥

十二月十一日

〔結願日中〕 午前十時三十分

先 乱声

出仕

下臈出仕

次 着座樂

次 総礼

次 文類偈 真四句目下

念仏讃

淘五

三重念仏

附物

和讃

弥陀大悲ノ誓願ヲ

次第六首

五遍返

次 回向

願以此功德

附物

次 総礼

次 退出樂

退出

下臈退出

以上



九日

午後三時

御伝鈔ごでんしやう

浄土真宗の開祖である親鸞聖人の生涯を記した絵巻物「本願寺聖人伝絵」ほんがんじしょうにんでんえから、絵の部分を取り除き、文章部分（詞書）のみを抜き出した読み物です。本願寺第三代住職の覚如上人かくによしようにんによって、親鸞聖人の死後三十三年目の一二九五年に初めて制作されました。現在、東本願寺（真宗本廟）をはじめとする浄土真宗の寺院では、報恩講の際、御絵伝ごえでん（親鸞聖人の生涯を描いた掛け軸）を荘厳し、この御伝鈔を拝読します。



本山（東本願寺）での御伝鈔拝読の様子

十一日 午前九時三十分

帰敬式ききようしき

帰敬式は、「おかみそり」とも言われ、「仏」「法」「僧」の三宝に帰依し、宗祖親鸞聖人が明らかにされた「教え」に自らの人生を問いたずね、真宗門徒として新たな人生を歩み出すことを誓う大切な儀式です。

受式されますと、仏弟子としての名告り（名前）である「法名」（釋○○あるいは釋尼○○）が授与されます。「帰敬式」は、お釈迦様（仏陀）の弟子（仏弟子）になることであり、法名は、南無阿弥陀仏の教えにみちびかれ、仏道を歩む者となった新たな名告りです。したがって、生きている「今」受式することに、帰敬式の本来的意味があります。静岡別院では、毎年本山より御鍵役（真宗本廟の両堂に奉仕し、儀式等について、門首を補佐する役職）をお呼びし、式を執行していただいております。



静岡別院本堂での帰敬式（剃刀の儀）の様子



帰敬式日程

十二月十一日

九時～

九時二十分～

九時三十分～

受付・日程説明

受式者入場 着座

御鍵役出仕

・開式の辞

・真宗宗歌斉唱

・三帰依文唱和

・剃刀の儀

・執行の辞

・法名伝達

・誓いのことば

・恩徳讃斉唱

・御鍵役退出

閉式の辞

九時五十分～

以上

